

平成19年度第1回三重県教育改革推進会議【議事録兼概要】

I 日時 平成19年8月8日(水) 14:00～16:40

II 場所 プラザ洞津「孔雀の間」

III 出席者 【委員】伊藤 博和、井上 邦子、上島 和久、江崎 貴久、大西 かおり、
小笠原 まき子、加藤 正彦、川岡 加寿子、木本 博文、佐伯 富樹、
田尾 友児、高橋 貞信、中川 弘文、中村 真子、西田 寿美、平岡 仁、
向井 弘光、森本 敏子、山北 哲、山田 康彦
【事務局】安田 敏春、鎌田 敏明、東地 隆司、坪田 知広、真伏 利典、増田 元彦
山口 千代己、竹郷 秀樹、梶原 久代、中谷 文弘、丹羽 毅、山田 正廣、
北原 まり子、中尾 洋一、中原 博、林 良充、安田政与志
以上36名敬称略

IV 内容

1 挨拶

国の教育改革の動きと法改正の趣旨を踏まえ、また、これまでの本県の取組を引き継ぎ、今後の三重の教育改革の方向性を検討していただきたい。ここでの意見を十分に尊重させていただきながら、「人間力」を育む学校づくり、信頼される公教育の推進を目指していきたい。

2 推進会議設置の趣旨説明…資料1・2に基づき、鎌田副教育長から説明

3 委員任命

4 委員紹介…資料3に基づき、中谷室長から紹介 事務局出席者自己紹介

5 会長、副会長選出

→会長に佐伯委員、副会長に向井委員を選出した。

6 会長・副会長挨拶

【会長】

各委員が自分の立場で、「三重県の教育のあり方」というものを、もう一度自分の目線の中にとらえ、それをこの会議に反映して欲しい。

【副会長】

経済同友会の北城会長に企業のあるべき姿を問われ、それ以降、機会があれば教育に参加してきた。企業経営品質のノウハウで学校経営品質に協力したり、小・中学生対象の環境教室やリサイクル館を設け、地域に役に立つ施設も提供している。さらに、退職する団塊世代を教育界に活用できるよう、コーディネーターという制度を提案している。この会議に大いに期待している。

7 審議事項

(1)三重県教育改革推進会議運営要綱について…資料4に基づき、中谷室長から説明

《以下質疑応答》

【委員】

要綱に、部会は「調査研究し、その実施主体となる」あるが、教育委員会に提言するとかではなく、調査研究したことを推進会議が具体的に実施していくということか。

【会長】

あくまでも調査研究の実施主体という意味と理解している。

【事務局】

会長の説明のとおり、調査研究の主体を部会が担うという意味である。

【委員】

調査研究して終わりではいけない。結果を出していくことが会議の目的。研究したことが、その次どうなっていくか、知りたい。

【事務局】

部会でとりまとめたことを推進会議に諮り、推進会議でとりまとめたことを教育委員会で受け止めて、必要なものから実行していくことになる。

【教育長】

ここで調査研究していただいた内容を、教育委員会はしっかり受け止めて、参考にしながら教育行政に反映していく。中間的な段階で教育委員会へ報告していただき、それに対して意見があればもう一度フィードバックし、最終報告を作っていただく。今後の教育行政そのものに生かしていく仕組みを考えている。

【委員】

どれだけの期間で、どういった答申を出すとか、今後どのような計画になるのか。

【教育長】

テーマによって違ってくる。なかなか結論の出しにくいもの、十分慎重審議頂きたいものもある。一概に同一の期間で全部仕上げていくのは無理であり、しばらくしてもっと喫緊の課題が出てきたときは、順次フレキシブルに組み入れて、柔軟な形でまとめ、2年間で進めて欲しい。

【委員】

三重県教育改革推進会議条例の第1条にあるように、あくまでも調査審議の場として、条例通り動いていくという確認でよいか。

【会長】

よろしいでしょうか。ありがとうございました。
それでは運営要綱の（案）を取って頂き、決定。

「三重県教育改革推進会議運営要綱」承認

(2)三重の教育の今後のあり方について

①現状と課題…参考資料1～5に基づき、中谷室長から説明

②意見交換

【委員】

子どもたちの学力低下、規範意識の低下が特に大きな課題である。

教育振興ビジョンを策定した時期は、国の学習指導要領策定期と重なり、ゆとり路線を基調としている。その後の教育を巡る状況を考えれば、学力向上を打ち出す必要があり、できるだけ早期に教育振興ビジョンの全面見直しが必要である。

高校再編活性化計画は、もともと、少子化を活性化の好機と捉え、高校の魅力化づくりを目指すとしていた。夢に踏み込んだ対策が欲しい。例えば、中高一貫教育について、併設型や中等教育学校も前向きに検討していく必要がある。

【委員】

幼稚園では、子どもの主体的活動・実体験から学ぶ教育を行っているが、家庭や地域の教育力が低下しており、保護者や地域も巻き込んだ教育の再生が必要で、子育て支援や家庭教育支援に取り組んでいる。

就学前教育は生きる力の基礎を育む教育である。もう少し就学前教育にも目を向けた取組をしていく必要がある。

【委員】

市町の教育事務所がなくなったことによる県との連携のあり方、また県内でも地域による状況の違い等が今後重要になってくる。教育改革については、全国一律同じレベルということの効果があるのか、平等・公平・公正と言えるのか、現場に合った形で検討されているのか、子どもや教職員が意欲を持てるのか、いろいろな問題があり検討する必要がある。

子どもの数は減っているが、不登校の子どもたちは増えている。少人数教育等の実施で恵まれているところもあるが、一人ひとりの子どもにふさわしいきめ細かな教育ができていくかどうかには、問題がある。就学前から高校まで、つなぎをしていくことが大きな課題である。

【委員】

戦後日本国中で同じ教育をしてきた。ある程度のレベルは欲しいが、一方では地域らしさが欲しい。住む地域によって、必要なものが違うのではないか。地域らしさを出した教育をすることで、地域を愛する心が芽生えていく。人口減少の中、地域の人材育成の面からも、教育は重要になってくる。

【委員】

過疎・高齢化の影響が、地域の教育力に大変影響していることを感じている。最近大台町に学童保育ができた。核家族の進行によるものであり、引き継がれてきた日本の伝統的・道徳観のサイクルが切れてきたと、危機感を感じている。

100人以上の大きな学校と小規模校とでは、学校の雰囲気にも顕著な違いがある。差が出る原因について、教育現場で議論が必要だと思う。

【委員】

少子高齢化で、人材確保に非常に苦慮している。最近の若者は、漢字が読めないし書けない。学力低下、特に識字力が低下している。コンピュータの普及や新聞を読まない等、活字離れが原因ではないかと考える。学校教育にばかり委ねるのではなく、会社としても教えるべきこと

がある。

核家族になったことで、家庭や地域の教育力も希薄になってきた。子どもは宝であることをもっと教えてあげられるような状況になりたい。

人材確保として女性の働きやすい職場づくりを目指しているが、企業として教育も含めた子どもや家庭の支援に着眼点を置いている。

【委員】

学校保健に長く関わっており、学校教育に関心を持っていた。

- ① 日本の場合、教育にかける予算があまりにも少ない。（医療も同じ）財源が無くて改革ができるのか。
- ② 健康教育に対する理解が低い。学力も大事だが、生徒も先生も病んでいて、学力だけでいいのか。根本は健康ではないか。
- ③ 特別支援教育が本格的に始まって喜んでいる。三重県がモデルとなるような支援教育を打ち出して欲しい。
- ④ 普通の子どもが突然キレることが、確実に増えている。親でさえ自分の子どもの考えが分からない。親から子への伝承が途切れている。社会力を身につけさせることが大事である。地域とのつながりも大きな問題である。

【委員】

国の改革や県の教育がどの方向に進められて行くのか、心配している。公立学校の義務教育学校に勤める者として、一番願うのは教育の機会均等・教育水準の確保である。教育活動はすべて子どもたちのために行われているということが、忘れ去られているのではないかと心配している。現場にいる教職員はこれらの内容や方向性をしっかり把握し、学校現場の課題と教育改革の関係を認識したい。これからの改革が、子どものためになるものかどうかを考え、真に子どもたちのものになるように活かしていくのが、私たちに委ねられた大切な役割であると思う。

【委員】

先生が腰を据えて生徒を教えるということができにくい状況にあるのではないかと思う。学校側にクレームをつけるモンスターペアレントも話題になっているが、先生方に負担をかけないよう、PTA としても取り組んでいきたい。

高校卒業後、新入社員同士の会話ができない子が増えている。早期離職やニートなどの問題も、何故なのか PTA で協議している。

【委員】

以前県 P や高 P の役員をしていた頃、学校週 5 日制やゆとり教育という問題があり、導入する前から問題点が指摘されていたにも関わらず、導入に踏み切った国の対応も拙かったのではないかと考えている。文科省に良いように振り回されている気がする。

紀南でコミュニティースクールに取り組んでいる。魅力ある運営の仕方は難しいが、この学校を残していくため、地域の人に分かって欲しい、子どもたちに来て良かったと思って欲しいと願い、魅力ある学校づくりを目指している。

【委員】

昨年奈良県から転勤し、今春、亀山工場で初めての入社式があった。1 時間程の入社式で約 60 名の新入社員のうち 3 人が倒れた。また、入社 4 ヶ月程で、既に 2 人が退社しており、1

人が退社を考えている。退社理由は共通して、「本当は別の仕事がしたかった」「体力的に付いて行けない」とのことである。最近の高卒の子は弱いと感じている。体力の問題もあるが、短時間の緊張感に耐えられない。一方でメリハリが付けられない。12時間2交代勤務の立ち仕事に耐えられない子どももいる。体力や心に問題があるのではないか。

亀山では、小中高が連携し相互の交流もやっており、よい試みであると思う。企業が学生に期待するのはコミュニケーション力である。学校を越えた縦の交流は、コミュニケーション力を鍛えるのに良い試みであると思う。

【委員】

公立学校は、全ての子ども達に学ぶチャンスが与えられなければならない。高校生はいろいろな個性がありパワーがあるが、学ぶ意欲は低下している。何故落ちたのか、自分の教え方、学校としての接し方、地域との関係等考えていかなければいけない。

学校現場にあっては、格差があってはいけない。学校は組織力を大切にしたい運営が大事であり、子どもたちが「自分達は大切にされている、認められている」と感じるような、学校づくりが必要である。

子どもや地域の実態を踏まえて、特色ある学校経営をやっていくべきであり、そのためには地域との連携が大切になってくる。

地方分権の中で、三重県らしい教育のあり方を創っていきたいが、大事な視点は現場と子どもを見据えることである。

【委員】

昨年松阪市P連の本部役員をして、学校現場の先生方の大変さが分かった。保護者の多様化で、同じ保護者として胸が痛い思いをすることもある。

親は一生親として子どもを見ていく。毎日元気であること、子育ての最終目標である自立に向かって、役に立つ社会人に成長すること、それが親としての望みである。親として、地域代表として、何か役に立てればと思う。

【委員】

34年間あすなろ学園で児童精神科医療に携わってきた。地域や家族の中で何ともならないという形で外来に来て、入院治療したりする。そういう子どもに関わっていると、大人が工夫して社会との関わり方を見つけてあげると、ずいぶん違ってくる。学力意欲を無くしてきた元凶があって、それに対する手当がきちっとされたら、地域でやっていける大人になる。特別支援教育にからむ子どもたちも、ちょっとした援助があれば、自立できるような人が増えていくはずであり、目の前にいる一人ひとりを大切にしていけることが、根本である。違いを認めて、差別するのではなく、少し手当して仲良くやっていくという考え方が大事である。そのためには、援助する人が多く必要である。

【委員】

年間50人の児童数が増加し、今後も増加が予測される小学校に勤務している。450人の内の54名が外国籍の児童で、10カ国にまたがる。義務教育が終了する段階で、進学か就職かの瀬戸際に立つが、そこで親子の対話が成り立たなくなっている。母国との教育制度の違い、親子間での言葉の違い、親の識字力などが原因。夜間の家庭訪問も非常に多くなる。

この子たちを日本の子と同じように育てていく必要があるという認識でいる。日本語指導の問題、学力を付けさせる補習の問題、言語圏の問題などの他、保険証の問題など学校だけで収まらない問題が多い。

現場の教育は非常に多忙である。朝の迎えから夜中の家庭訪問まで、職員の勤務時間も長い。こういう現状を抱えている学校があることを知って欲しい。三重県の学校全体が、今後同じ様な状況になることが予想される。課題の一つとして考えて欲しい。

【委員】

これから少子化に向けて、子どもたちが大きくなって日本を背負っていかなくてはならないのに、予算が段々減っていくのを感じる。小保の環境にギャップがあり、小学校入学時に対応できない子どもがいる。小学校・保育園・幼稚園との連携が大切である。社会性に問題があり、集団生活ができない、切れる子が多くなってきている。心を育てていくことが大切ではないかと思っている。保育園の現場では、小中高や地域の老人会などいろいろな方との交流により、体験を通して学んで欲しいと思い、そうした取組がなされている。

【委員】

教育の機会均等、教育水準の確保を考えると、市町の財政力に応じて三重県全体として手を講じて欲しい。

義務教育は、育ち・環境・体力・学力・心の持ち方全部が違う子たちが、一つの教室の中で授業を受けている。こういう中で、ここまで到達させましょうというハードルがある。ハードルを越えないまま進級した子は、積み上げが無くて、45分間、行をしているようなものである。そういう状況にある子たちに何らかの形の手だてを講じていかなければ、本当に一人ひとりの子どもたちの教育を保障することにつながらない。とても難しいことではあるが、そこに何らかの手だてができれば、本当に学力は高まるし、一人ひとりの個がもっと伸ばされる。

大きくなって学ぼうとした気持ちが出た時にどうやって学んでいったらいいのか、学び方ぐらひは少なくとも教える必要がある。

【委員】

三重県を元気にし、支える様な人間を育てたい、そういう観点から教育を考える必要があるのではないかと思う。三重県自身が全体の動きの中で地盤沈下してはいけない。きちっと根付いて元気になっていくことが必要で、そのため人間形成が必要だと思っている。

学校の教員を取り巻く目は非常に厳しく、教員はそういう中でもしっかりとした教育をしなければいけないという、大変な時代だと思う。現職教員の支援とともに、学生をどう育てるのか、教員としてどう送り出していくのかと、教員養成も考えていかなければいけない。この会議の中で、学校の教員への支援も是非大事な事項として考えて欲しい。

【会長】

皆さんから頂いた意見等は、今後のこの会議の検討事項として、また改めて機会を設けたい。

(3)部会の設置について…資料5～7に基づき、中谷室長から説明

《以下意見交換》

【委員】

どの部会に関しても、学校のサイズや評価や配置といったある意味技術的なことではなく、小中学校の活性化や特別支援の根本や学校経営の継続的改善などを中心に議論して欲しい。

【会長】

今後この部会の設置が正式に決まり、それからメンバー等が決まった段階で、今言われたような事を配慮され、皆さん方いろいろご意見を頂ければと思う。

【委員】

この3点に特化されることなく、総合的に意見を取り込んで、施策への反映・財政的措置などもお願いしたい。

【会長】

部会の中での意見は、当然反映され活かされるべきだと考えている。

【委員】

3つに分かれてしまって、部会での活動に特化するという事か。総合的なディスカッションの場は別にあるのか。

【事務局】

ある程度部会での議論が煮詰まった段階で、全体の会議を持ち、こういった意見交換をしていただければと思っている。

【委員】

一応分けてあるが、重なる議論もあると思う。途中で違う部会との整合性はどうか。部会長だけ会議をしてもらおうとかいうのはどうか。

【事務局】

部会によっては議論がまたがることもあるので、推進会議または部会長さん方と連絡を取って調整したいと思っている。大きな本会議は、部会の議論がある程度まとまった段階で第2回目と考えていたので、2月に予定しているが、部会の進行状況によっては若干前後することはあると考えている。

【委員】

情報の共有化が非常に大事だと思う。それぞれの部会で話し合われたことをきちんとフィードバックできるシステムを作って欲しい。

【委員】

それぞれの部会で、目処として年度内に何らかの答申のようなものをまとめることが求められているような部会は予想されるのか。

【事務局】

今のところ、「小中学校適正規模のあり方」と「特別支援教育」については、できれば年度中にある程度のまとめができないかと、また「学校経営改善」については、年度をまたぐこともあるかと思っている。

【委員】

あるまとめのようなものを、改めてこの推進会議の全体会議で検討して決めていこうという予定だと理解してよろしいか。

【会長】

大きな流れとしては、そうだと思う。

それでは3つの部会の設置を認めて頂きたいと思う。よろしいか。

異議はないようであり、各委員方からの要望等があったので、その点事務局の方で現実に各部会の進行状況に合わせて、配慮願いたい。

「部会の設置について」承認

①部会の委員について…配布資料に基づき、佐伯会長から説明

部会には、各部会4名の専門の、部会に関してのみの委員も参加する。今後県教育委員会の委嘱を経て、4名の方々が各部会に加わって審議に参加する事になる。

「部会の委員について」承認

②今後のスケジュールについて…資料8に基づき、中谷室長から説明

《以下意見交換》

【委員】

次回から、資料を事前に欲しい。

【会長】

事務局の方で配慮願いたい。

【事務局】

分かりました。

【委員】

それぞれの部会等の進捗状況を、その都度教えて欲しい。

【副教育長】

各部会の議事録についても、整理でき次第全部の委員さんに配らせていただく。会議については公開が基本線なので、関係の方にご意見を聞いていただくのも構わない。会議の資料は、事前にお送りさせていただくようにする。

【会長】

ご協力お願いします。

「今後のスケジュールについて」承認

(4) その他

なし。

8 連絡事項

以 上